

北原東代著
『非凡なる凡婦 白秋の妻菊子』
(春秋社)

著者の北原東代は、白秋の長男、隆太郎の妻。菊子の印象、手料理、掃除の仕方、着ていた服、会話、好きな読書、孫との関りなど、同居でなければ知りえないエピソードが満載。例えば、初めて菊子に会ったときのことを次のように述べる。

その瞬間、ハツとするような老婦人の清々しい美しさに、私は胸打たれていた。小柄でお化粧の気配もなく、灰色がかつた直毛の髪は耳下あたりの長さには揃えられて、全身から高潔な人柄が感じられ、私は即座に大安心を得ていた。

こういう文章の合間に、菊子、隆太郎のそれぞれの「日記」、また、白秋が「多磨」その他に発表した文章が散りばめられている。次の、一九二一年の菊子の日記は、菊子が白秋に妊娠を告げた時のもの。

一〇月一日 ほんとだつたかい。Hが待つててまづニコニコして聞いて下さつた。

Hは白秋のこと。著者が、義母菊子を尊敬し、心をこめて語る文章に臨場感があり温かい。
(水上比呂美)

松村正直著
『戦争の歌』
(笠間書院)

明治以後は戦争が続き、戦争の歌が多く作られた。それらの歌五十一首を選び、それぞれ見開き二ページで解く書である。

「軍国主義的だから悪い歌」「反戦的だから良い歌」といった捉え方では歌を讀んだことにはならない。それは戦前に「軍国主義だから良い歌」「反戦的だから悪い歌」とする考えが存在したのと同じことの繰り返しではない。(略)

戦意昂揚の歌、戦場の兵士の歌、銃後の家族が兵士を案ずる歌。それぞれ異なる立場の歌が並ぶ。そこからむしろ戦争の全体像が見えてくる。著者も指摘しているが、ニュース映画をみての歌がかなり多く、報道によって戦争の歌を詠むそのスタイルは現代の詠い方と同じに思える。

私たちは自分自身の頭で考えているつもりでいて、実は知らず知らずのうちにマスコミの見方や判断に同調しているだけのことも多い。そうした点に自覚的であることは、今後ますます大切になってくるにちがいない。

と著者は述べる。
(小田部雅子)

倉阪鬼一郎著
『怖い短歌』
(幻冬舎)

腸詰に長い髪の毛が交つてゐた
ジツト考へて
喰つてしまつた

夢野久作

「猟奇歌とその系譜」を軸に、怖ろしい風景・向こうから来るもの・死の影・内なる反逆者・負の情念・変容する世界・奇想の恐怖・日常に潜むもの、の九章の構成のアンソロジー。一一一八年生の西行から一九八六年生の谷川電話まで「怖さ」の種類はさまざまだが、残酷場面、怪談不可思議、殺意、希死の告白などぞくつとする、ひやりとする、神経感覚に訴える歌が集まり、また人に言えぬネガティブな気持ちについて共感する歌も収められている。

十通り以上の死に方語り終へ少女はおほきためいきつきぬ 伊藤一彦

和製ホラーの映画、小説の優れた作り手が近年多く現れた。次なるコンテンツとして短歌という表現形式が発見されたのか。新書版での出版に、短歌を実作せずとも読んで楽しむ所謂「純粹読者」の出現が予感できる。短歌の世界への興味のきつかけとなりそうだ。
(白川ユウコ)